

特産貝復活へ再始動

「舫（もや）い」は、船と船をつなぎ合わせることや、寄り合っていることや、一緒に仕事をすること、集落内の共同作業や利益の共同分配などを表す。沿岸地方では地域のつながりを示す「結（ゆい）」の意味で使われることも多い。

して稚貝は採れるのか。仮に順調にいった場合でも、出荷は2014年になる。

小泉さんが本格的にエゾイシカガイ養殖に取り組み始めたのは1996年。独特の歯応えとほのかな甘さが受け、すし業界から引き合いが高まった。取引単価は1キログラム2千円を超えホタテガイの数倍。若手漁業者も加わり広田湾漁協は特産品化を進めてきた。

同漁協気仙支所管内のエゾイシカガイ生産者6人のうち、再開を予定しているのは5人。養殖施設や船がないため、協業化する。

熊谷さんは「エゾイシカガイはまだ伸びしろがある。漁師の家に生まれた以上、ここを離れることは考えなかった」と決意は固い。

小泉さんも「俺が始

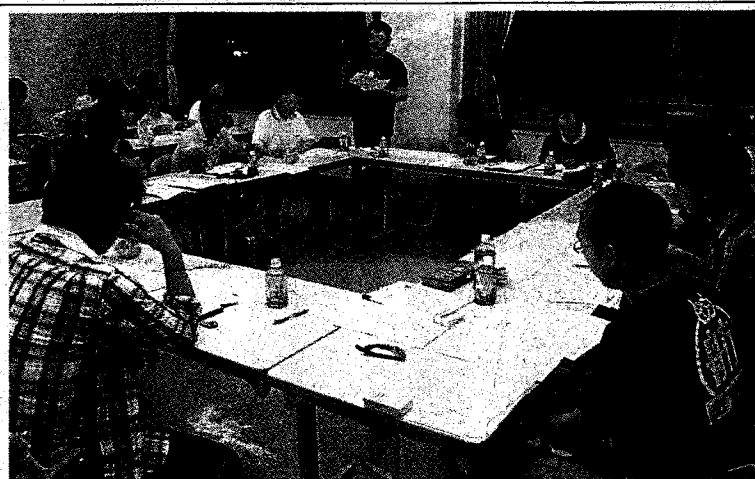
ボランティア結束

大船渡市内の被災者を支援するNPOなどをボランティア団体が、横の連携を強めようとしている。被災者の生活基盤は避難所から仮設住宅に移りつつあり、今後の活動に向けては新たなニーズ把握が課題となっている。定期的な会合で各団体が情報交換し、より効果的に活動する方策を模索する。

大船渡

NPO法人自立生活サポートセンター・もやい（東京都）が呼び掛け、同市立根町の県住宅に入居した住民のケアを立福社の里センターで6月30日、関係団体が初のミーティングを開いた。市内のNPO法人、避難所運営、社会福祉協議会、市など7団体のほか、他県から来て活動している団体もオブザーバー参加した。これまで炊き出しや物資配

会合で横の連携強化



課題を共有する目的で話し合う支援団体＝6月30日、大船渡市・県立福祉の里センター

仮設入居後のケアに力

宗教の勧誘まがいの訪問もあるという。それらを解消するため、共通の調査ができないか検討。弁当配達やイベント開催など団体ごと活動目的や内容が異なるため難しい面もあるが、ニーズ把握のためには共同歩調が必要な現状だ。会合は今後、週1回ペースで開く予定。行政だけに頼っては鈍るスピード感を横の連携が補うことが期待される。開催を呼び掛けたもやい（岩手担当統括の大関輝一さん（37）は「地元」の団体が多く参加してくれて良かった。仮設住宅生活の支援のやり方はそれぞれ違いますが、今回が連携の始まりになれば」としている。

象徴のサケ「回帰」

遼上数本州一の宮古・田老

海中からモニュメント



がれき撤去作業で回収された鉄製の



大槌っ子も岡

元代表監

元サッカー日本代表監督の岡田武史さんを中心に円陣を組む子どもたち＝大槌町

元サッカー日本代表監督の岡田武史さん（54）は6日、大槌町大槌中グラウンドでサッカー教室を開き、子どもたちとボールを追いかけて、体を動かす楽しさを伝えた。町内の幼稚園や保育園に通う園児ら約50人が参加。岡田さんは思い駆けこで体をほぐし、シュートやドリブルのこつを指導した。強い日差しの中、全宮で円陣を組み「頑張

宮古市田老の海中から、津波で流されたサケのモニュメントが見つかつた。遼上数本州一を誇る田老川。漁業モニュメントは10日